

児童のC・A・T反応の研究

— C・A・T連想テストの反応分析による
普通児と施設児の性格 —

日本女子大学

児 玉 省
本 持 美 恵 子
立 紀 子
平 川 喜 久 江
原 田 雅 子

目的 普通児と施設児の性格の差の研究。

対象 6才〜11才の普通児、施設児男女各15名 計60名。

方法 連想テスト、C・A・T（早稲田版）を使用し連想テストは次の角度から分析した。行動、敘述、反対語、快不快、歪曲、個人承合的、一般的、特殊な反応。C・A・Tは重要題目、登場人物の拡がり、社会的態度、結末の分析、構造の角度から物語を分析した。結果 連想テスト、行動、歪曲、特殊な反応は施設児に多く、敘述、快不快を表わす感情表現、一般的な反応は普通児に多くみられた。

C・A・Tは重要題目において、世話奉仕、英雄的な物語が普通児に多く、遊び、場面敘述が施設児に多く見られた。登場人物は普通児が多く、登場人物の社会的態度は施設児に非親和や無関心なものが多かった。主人公の態度として、自己顕示、正義感が普通児に多く、攻撃的・排他的、食物や着物への欲求が施設児に多くみられた。物語の結末は、普通児の方が快や満足が多く、場面敘述的で結末のついていないものが多かった。なお物語の語数は普通児の方が多かった。結論〈普通児〉1、思考方向が素直で客観的。2、幅広い感情経験、

生活経験を持つ。3、自己顕示的傾向が強い。4、物語の構成表現力がある。5、親和的で正義感が強く、肯定的な社会的態度を持つ。

〈施設児〉1、遊びに興味を持ち、仲間との動的な生活が考えられる。2、反対語や歪曲が多く、思考方向が素直でない。3、個性的。4、感情表現が少なく、構成員が劣っている、と同時に、変化の少ない生活内容が考えられる。5、消極的（対人関係において）。6、非親和的対人関係を持ち、しばしば攻撃的、排他的である。

知的優秀児の特性に関する

基礎研究

（その1）発達的特徴について

東京家政大学

森 重 敏
上 原 万 里 子
伊 藤 礼 子

一、目的 最近の諸研究で明きらかにされてきた知的優秀児の特性を、わが国の子どもたちにおいて多角的に把握し、確証を得ること。今回は先ず発達的特徴についての調査に主目標をおく。

二、方法 対象校は港区立三光小学校、東京家政大学付属幼稚園、東京小金井市のこどものくに幼稚園。優秀児の検出方法は、小学校児童には既に実施してある集団知能検査の結果知能編差値（S_S）六五以上のもの四五名にWISCを、幼稚園児には、WISC、田中びねり式、山下式の検査をおこない、IQ一三〇以上のもの三名（小二五、幼八）を対象とした。比較群としての普通児はS四五〜五四またはIQ九三〜一〇八のものについて、無作為標本抽出法により優秀児とほぼ同数を抽出した。但し幼稚園児は一般の標